

守れ 地域医療

第2部 支えはぐくむ

4

「おばあちゃんも畠行くの?」「草むしり程度ですけど」
往診中でも、花戸医師と患者の談笑は絶えない(東近江市)。

午前九時、花戸貴司医師（38）の携帯電話が鳴った。「はい、永源寺診療所です」。この日、外來は休診。診療所の加入電話が転送されてきた。

山田雄一さん(90)は、三日前に自宅の畠で転倒し、左胸を打った。診療を終えた花戸医師は「気を付けてや」と優しく声を掛けた。病院なら「危

二十四時間、患者が連絡できないから煙には行かない。で」と言うかもしれない。それでも深夜の呼び出で、あの人は煙が生きないんです」

け。一顔が見える関係た
し、常に電話できる安心
感もあるのか、皆さん時
間に配慮してくれて助か
ります」
治医大（栃木県）を卒業
した。勤務医時代は、今
と考え方が違った。湖北

鈴鹿山脈を抱える東近江市の永源寺地区。高齢化率は約三割で、人里離が何でも病気を治した総合病院（木之本町）では、小児科医として「何

「山中に住む人もいい」と、休日もなく治療された。参議院議員の二月廿二日暮れて。

多くの、車で巡回往診をする。 診療所は通れない人には明るい暮れ方 永源寺診療所には八年 前に赴任した。外来のお



その人らしい生き方尊重

永源寺診療所 国民健康保険診療所として一九八四年、東近江市の中心部から車で約二十分の同市山上町（当時は永源寺町山上）に開設。今年四月に花戸医師が市の指定管理者になり、公設民営となつた。永源寺地区は人口約六千人。住宅の患者は五十人で、外来には一日五十人以上が訪れる。

が言つた。「先生、もうあかんなあ」。家族が死を受け入れているのに、自分は何をしているのか。家族に見守られ、穏やかに。ある朝、自宅の庭にキヤベツやネギが置かれていた。誰が届けたかは分からぬが、地域に認められたようであつしかつ

かに迎える最期もある。地域医療の義務年限は住民の言葉で、あつたま
て気付いた。「治療は必
要最小限でいい。その人なく、診療所でこそでき
らしい人生を支えるのも寺に残つた。「大病院で
医師の役割なんだ」息子が所属する少年野球

以来、患者の家族や趣味の話に耳を傾けた。人柄を把握し、やみくもに病院での検査や入院を勧める。

病院の構造、病室を
めず、患者が望む生活
尊重するよう心掛けた

者さんに育てられていました」。贈り主不明の野菜のプレゼントは、今も続いている。

患者さん培育